

「これだけ暑いのはメリーのせいよね」

完璧な独り言だった。もしも聞き耳を立てている誰かがいたら、私が誰かに向かつて話しかけたと勘違いしたことだろう。もちろん言葉に意味はないし、メリーはここにはいない。私は一人で、季節は夏だった。

夏。
清々しいくらいに、夏。

「八月も半ばなのに、何故こんなに暑いのか……？」
今度は独り言には聞こえなかったのか、通りすがりの女学生がびくりと私を見て足早に去っていく。逃げるようだ、というか逃げられたのかもしれない。変な人だと思われたのかもしれない。しれない、というか、そのものだろう。そんなことを気にしてられないほどに暑くて、私は手をばたばたと振って顔を仰いだ。

暑い空気がかき混ぜられて余計に暑かった。

夏。
みーんみんみん、と蝉が鳴く。

じーいじいじい、と蝉が笑う。

喫茶店のテラスから見える空は泣きたくなるくらいに青空だった。雲はない。ついでに風もない。真昼だから月も星も見えず、したがって時間も場所もわから

ない。私の能力は夜にならなければ意味がないのだ。

ただ、太陽は真上にあるから正午近くだということ
はわかるし、場所は地元なので把握している。京都の
外れ、学校側の喫茶店にあつらえられたオーブンテラ
スで、私は独りまんじりともなくアイスコーヒーを飲
んでいた。

「あ・つ・い・わ——」

いくら言葉で繰り返しても暑さはどうにもならない。
テラスには日よけのパラソルが差してあつたけれど、
強い陽射しは容赦なく空気を蒸していく。背後のク
ラーがきいた店内に比べれば天と地の差だった。

何も好きこのんで天と地の「地」にいるわけじゃな
い。そこまで私は変人ではない。

単に、店内が満員だっただけだ。

「コーヒーを買う前に気づくべきだったわね……」

大きめの紙コップに突き刺さったストローに口をつ
ける。ちゅー、と吸い込むと、温くなり始めたアイス
コーヒーが喉を潤してくれる。自分でいれたコーヒ
ーよりは薄いけれど、今は冷たさがありがたかった。

コーヒーを買わなければ他の場所にいくなり何なり
できたけれど、買ってしまった以上はまさか突き返す
わけにもいかない。コーヒーを飲み終わるまでは、こ
こでこうしていなければならぬ。

夏で、

暇だった。

八月と言えば休みだから——と考えるのは甘い。目の前の道を半袖半ズボンで駆けてゆく小学生たちにはわからない悩みだけれど、人間、時と場合によつては夏休みだろうが何だろうが学校まで出てこなければならぬこともあるのだ。あまつさえ、朝一番と夕方最後以外の講義以外はやることもない、というひどい時間的拘束を受けることもある。普通はそうでもないけれど、あくまでも時と場合によつては、そういう不条理なことを味わわなければならぬのだ。誰のせいとも言えば、きつと私以外の誰かのせいに違いない。マエリなんとかさんの陰謀だろう。

言い訳完了。

そんな風にして、あまり語りたくない理由で私はここにいた。午前の講義が終わり、午後の講義まではまだかなり時間がある。学校まで戻つてもやることはないし、家にまで帰るのは面倒くさい。どこかへ遊びに行くには暑さでやる気がない——そんな、暇が所在なく傍らにたたずんでいるような状況だった。

秘封倶楽部の活動も、できはしない。

オカルトサークルの活動時間は基本的に夜だし——何よりも、メリーがいなければどうしようもないのだ。

ようは、暇を持て余していたのだ。

脳が蕩けてしまいそうなくらいに暇だった。「隕石が落ちてこないかしら」

雲も星も見えない空を見上げながらぼそりと呟く。

先日メリーと見た映画を思い出したのだ。空から超巨大隕石が落ちてくることを察知した合衆国が総力をあげて宇宙へと乗り出すのが、落ちてくる巨大な星こそが本当の地球だったという、面白いのか面白くないのかよくわからない映画だった。ちなみにオチはと言え、どちらが本当の地球なのかもはっきりしないままに、合衆国の秘密兵器によつて衝突はまぬがれ、二つの地球はまた広い宇宙で離ればなれになって二度と巡り合うことはなかったという、予算と時間を斜めに投げ捨てたような感じだった。

メリー曰く、

「これ、続編があるそうよ」

とのこと。見たいような、見たくないような。そのうちメリーが持つてきたら一緒に見ることにしよう。

そんなとりとめのないことを考えながら、視線を空から地上へと戻す。隕石が落ちてくることもない平和な駅前には、人の行き交いで賑わっていた。そのせいで、気温が一、二度あがっているような気もする。

秘密の匂いは、どこにもなかった。